

# 長町駅東遺跡第 8 次調査

—仙台市あすと長町 41 街区・マンション建設に伴う発掘調査報告書—

2008 年 3 月

仙台市教育委員会



## 序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。

市内には、旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が残っております。先人たちの残した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ次の世代に継承していくことは、現代に生きる私たちの大きな責務であると考えております。そうしたなかにあって、国史跡に指定され調査・整備の進む仙台城跡や、山田上ノ台遺跡を保存し、体験学習型施設として整備された縄文の森広場などは、市民の皆様の深いご理解とご協力のたまものといえます。

本報告書は、平成 17 年に本市では 7 番目となる国史跡指定をうけた郡山遺跡の西側で進められている、「仙台市あすと長町土地区画整理事業」に関連した長町駅東遺跡の調査成果をまとめたものです。

今回の調査では、竪穴住居跡などは確認されませんでしたが、長町駅東遺跡からはこれまでに総数 300 軒近い竪穴住居跡と、大溝と材木列による区画施設が発見されるなど、多賀城造営以前の陸奥国府と考えられる郡山遺跡の官衙を支えた集落として注目される遺跡となっております。

今回の調査成果が、地域の歴史を解き明かしていくための資料となり、多くの方々に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に際しまして、ご指導、ご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げる次第です。

平成 20 年 3 月

仙台市教育委員会

教育長 荒井 崇



## 例　　言

1. 本書は、仙台市教育委員会が実施した「仙台市あすと長町土地区画整理事業」に関連する長町駅東遺跡第8次調査（41街区・マンション建設）の発掘調査成果についてまとめたものである。
2. 発掘調査は、仙台市教育委員会のもと、株式会社シン技術コンサルが行った。
3. 報告書刊行にあたっては、仙台市教育委員会文化財課 工藤信一郎、主浜光朗の指導の下、遺物整理から本書の編集にいたるまでの作業は、株式会社シン技術コンサル 藤田亮一が担当した。
4. 本書の執筆については、Iを工藤、II～VIを藤田が担当した。
5. 調査及び報告書の作成に当たり、ナイス株式会社仙台支店よりご協力を賜った。記して、感謝の意を表す次第である。
6. 調査・整理に関する全ての資料は、仙台市教育委員会が保管している。

## 凡　　例

1. 遺構図中の座標系は、「平面直角座標第X系」を基準としている。図中及び本文記載の方位北は、全て座標北を基準としている。
2. 本書中の上色の記述には、原則として『新版標準上色帖』（小山正忠・竹原秀雄 1997）を使用している。
3. 調査において検出された遺構については、以下の略号を使用し、遺構ごとに略号を付した。  
S D : 溝跡      P : ピット      S R : 河川跡
4. 遺構番号については、長町駅東遺跡調査開始時からの通し番号である。
5. 出土遺物の登録には、以下の遺物記号を使用し、遺物ごとに番号を付した。  
C : 土師器（非クロクロ調整）      E : 須恵器      G : 平瓦
6. 土師器実測図内面のスクリーントーン（網）は、黒色処理されていることを示している。
7. 遺構図等の縮尺は、下記の通りである。但し、その縮尺で掲載が困難なものについては、適宜縮尺を変えていく。各図にはそれぞれのスケールを付した。  
平面図：1/120・100・40      土層断面図：1/80・40
8. 遺物実測図の縮尺は1/3とし、掲載した遺物写真は原則として同じ縮尺とした。但し、写真図版7-7・10・14以外のものは1/2で掲載した。
9. 遺物観察表中の（ ）内数値は残存値を示す。

## 目 次

序 文

例 言

凡 例

I	調査に至る経過 .....	1
1.	調査事由 .....	1
2.	調査要項.....	1
II	遺跡の立地と環境 .....	1
1.	長町駅東遺跡の位置 .....	1
2.	周辺の遺跡.....	1
III	調査の方法と概要.....	3
IV	基本層序.....	5
V	検出遺構と出土遺物.....	7
1.	A 区.....	7
2.	B 区.....	9
(1)	溝 跡 .....	9
(2)	ピット .....	12
(3)	その他 .....	13
3.	C 区.....	13
(1)	溝 跡 .....	13
4.	遺構外出土遺物.....	14
VI	まとめ.....	16
	写真図版	
	報告書抄録	

## I 調査に至る経過

### 1. 調査事由

長町駅東遺跡は、仙台市南部の調都心整備事業である「仙台市あすと長町土地区画整理事業」の施行に伴い、平成3年・4年に実施された確認調査により、所在が明らかになった遺跡である。長町駅東遺跡の調査は、平成13年から現在まで継続して行われており、今回の調査で第8次調査となる。これまでに、総数300軒近い竪穴住居跡が発見されているが、特に平成15年・16年の調査では、集落の区画施設と考えられる材木列1列、一本柱列4列、通路状構造を伴う大溝跡が確認され、区画施設の変遷が想定されている。

第8次調査は区画整理事業に伴う調査ではなく、ナイス株式会社によるマンション建設計画に伴い、仙台市教育委員会に事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出されたことに始まる。開発地は、あすと長町土地区画整理事業地区41ブロック地内で、長町駅東遺跡の南端部にあたり、現況は宅地造成整備が行われ更地となっていた。平成15年に確認調査が行われ、溝跡などが確認されていたことから、教育委員会と事業者の協議を経て、計画されている南北2棟の建物部分を対象に発掘調査を実施することとなった。

### 2. 調査要項

遺跡名：長町駅東遺跡（仙台市文化財登録番号C-317）

所在地：仙台市太白区長町六丁目

あすと長町土地区画整理事業地区41ブロック1・2・3・5ロット

調査期間：2007年（平成19年）7月2日～2007年（平成19年）8月24日

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会文化財課調査係 工藤信一郎 主浜光朗

株式会社シン技術コンサル 調査員 藤田亮一 調査補助員 原野真祐

調査対象面積：約1,000m<sup>2</sup>

調査面積：700m<sup>2</sup>

## II 遺跡の立地と環境

### 1. 長町駅東遺跡の位置（第1図）

長町駅東遺跡は仙台市の南東部、太白区長町六丁目地内に所在する。JR東北線長町駅南側の旧国鉄貨物ヤード跡地内にあり、その範囲は南北480m、東西200mの90,000m<sup>2</sup>に及ぶ。平成17年7月に「仙台郡山官衙遺跡群郡山官衙遺跡 郡山廃寺跡」として国史跡指定を受けた郡山遺跡の西側に隣接している。

遺跡は北側1.5kmを流れる広瀬川右岸の、標高10m前後の自然堤防と後背湿地上に立地し、北を広瀬川、南を名取川によって画された「郡山低地」の中央やや西寄りに位置している。

### 2. 周辺の遺跡（第2図）

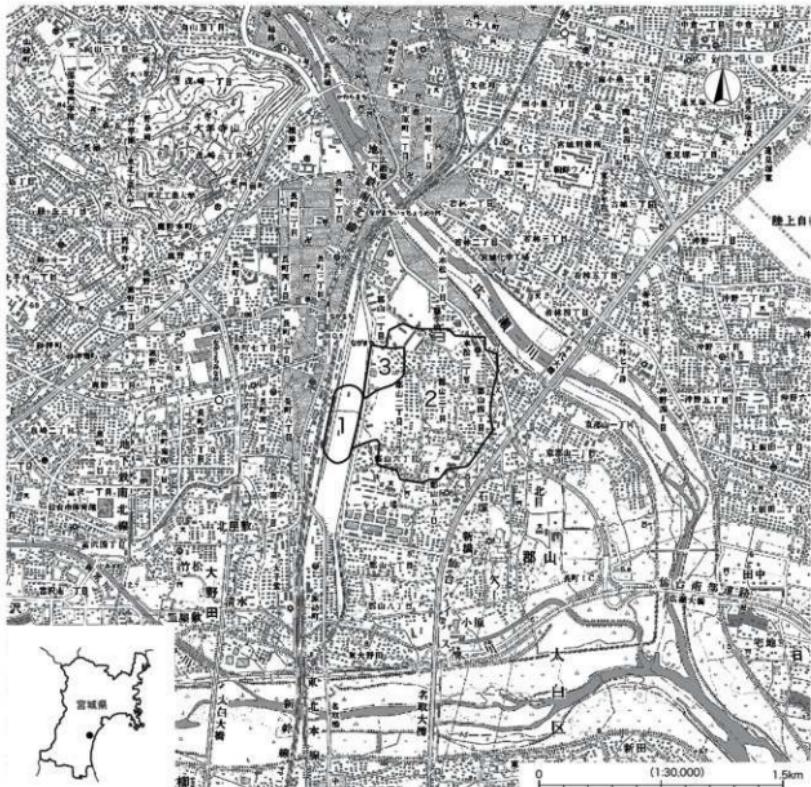
仙台市南部の太白区内には、名取川の両岸や青葉山丘陵の先端にあたる向山・土手内の丘陵部にかけて多くの遺跡がある。長町駅東遺跡の周辺にも多くの様々な時代の遺跡が所在しているが、関連する一部の遺跡を概観してみる。

本遺跡の東側に隣接する郡山遺跡は、飛鳥～奈良時代の官衙・寺院跡である。仙台市教育委員会では、昭和54

年から継続的に発掘調査を行っている。これまでの調査によって、7世紀後半～8世紀初頭にかけて大規模な役所跡が2回（Ⅰ期官衙・Ⅱ期官衙）にわたって造営されたことが明らかになっている。Ⅰ期官衙は、7世紀中頃から7世紀末にかけて造営され、古代陸奥國の建国に関わった重要な柵跡、Ⅱ期官衙は多賀城以前の陸奥の国府と考えられており、東北地方では最古の伽藍を有する寺院「郡山廃寺」が付属している。

本遺跡の北東側に位置する西台畠遺跡からは、100軒以上の竪穴住居跡が確認されており、長町駅東遺跡と合わせると総数370軒ほどの竪穴住居跡が確認されている。これらの住居跡は、7世紀中葉～8世紀初頭としており、官衙とほぼ同時期のものと考えられることから、郡山遺跡の西側一帯には、官衙の造営や運営に関わる集落が広がっていたことが窺える。

周辺の遺跡と歴史的環境の詳細については、仙台市文化財調査報告書第283集「郡山遺跡発掘調査報告書 総括編」（2005）、及び第315集「長町駅東遺跡第4次調査」（2007）を参照していただきたい。



1. 長町駅東遺跡 2. 郡山遺跡 3. 西台畠遺跡 国土地理院発行 地図地図25000 仙台を使用

第1図 長町駅東遺跡位置図

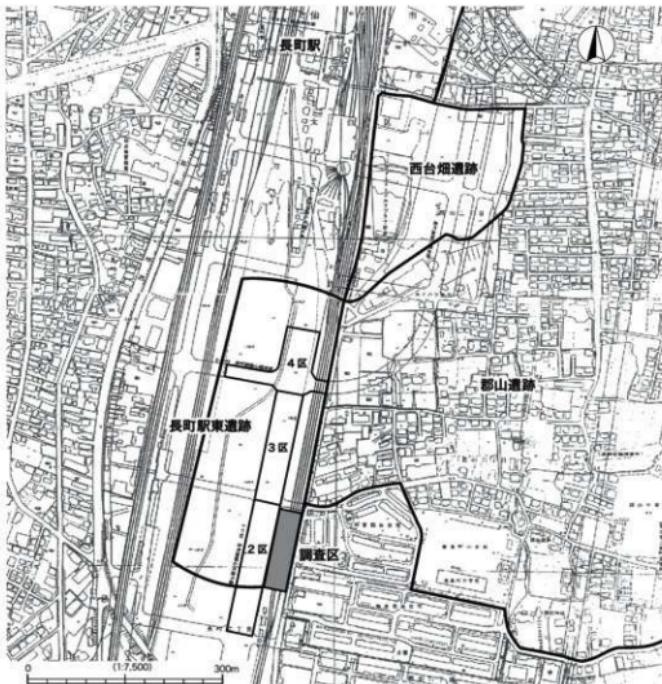
### III 調査の方法と概要

調査区設定にあたっては、マンション用地の建物部分を対象に北棟をA区、南棟をB区とし、その中にC区を設定した。

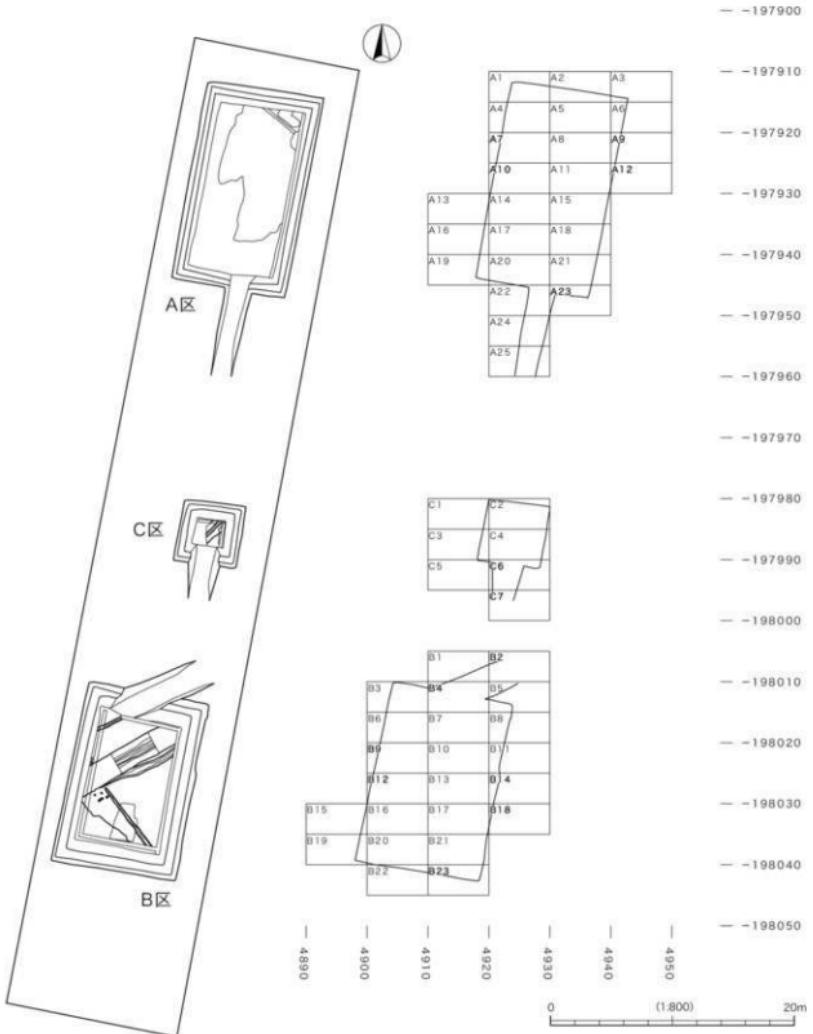
重機により盛土からⅢ層上面（遺構確認面）まで掘削してから、遺構の確認作業を行った。その後、下層遺構を確認するために、再度重機によりⅢ層を除去しⅣ層以下の調査を進めた。排土場所の関係で、A区から盛土及び表土掘削・遺構面精査・埋め戻しを行い、順次B区・C区と進めていった。盛土整地層はA区では1.3～2m、B・C区では2.5～3mもあり、盛土及び表土掘削にはかなりの日数を要した。

各調査区の大きさ及び調査面積は、A区東西14m×南北27m・約380m<sup>2</sup>、B区が東西14m×南北21m・約300m<sup>2</sup>、C区が東西5m×南北4m・約20m<sup>2</sup>である。

図面の作成については、「平面直角座標系第X系」を基準とし、5×10mを単位とする平面区配図を作成した。これを各区に合わせ、それぞれA 1～A 25、B 1～B 23、C 1～C 7までの番号を付し、それをグリッド番号として遺物の取り上げに使用している。調査の各記録は、遺構図面等については平面・断面図をトータルステーションで計測し、土層図については手実測・デジタルカメラによる写真実測及びトータルステーションを併用し、作業の迅速化を図った。



第2図 調査地点図



第3図 調査区位置図・グリッド番号図

## IV 基本層序

調査区には、表土として約2~3mの厚さで盛土整地層があり、これ以下を基本層序とした。比較的堆積状況の良好だったB区東壁を基準に分層した（第4~6図）。

B・C区は基本層序に大差はないようであるが、A区のIII層の下層については河川堆積層とみられるため、基本層から除外し土層図に観察表を付した。

I層：近年の水田耕作土で、層厚は10~20cmである。B区南北・東壁（第5図）の土層で確認された畦畔は、この水田耕作土に伴うものである。

II層：暗褐色の砂質シルトで、B区の中央部から東側だけにみられる。層厚は5~30cmで、東側に若干傾斜しながら厚くなるようである。SD 245・246溝跡は、この層の上面からの掘り込みが確認されている。

III層：褐色の砂質シルトで、鉄分を多量に含み、ほぼ全調査区でみられる。層厚は10~50cmで、非常に起伏が著しい堆積状況である。III層全体から土師器・須恵器片が出土しており、古代の遺物包含層と考えられる。SD248溝跡は、この層の上面からの掘り込みが確認されている。

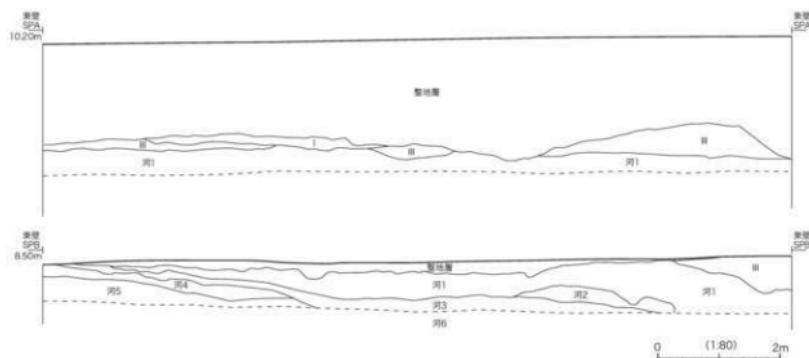
IV層：暗褐色の粘土質シルトで、層厚は10~40cmありIII層同様に起伏が著しい。この層の上位から若干土師器・須恵器片が出土している。

V層：褐色の粘土質シルトで、鉄分を多量に含む。層厚は5~50cmとIII・IV層同様起伏が激しく、南側に行くにつれて厚くなるようである。

VI層：暗褐色の粘土で、鉄分を多量に含みグライ化している。

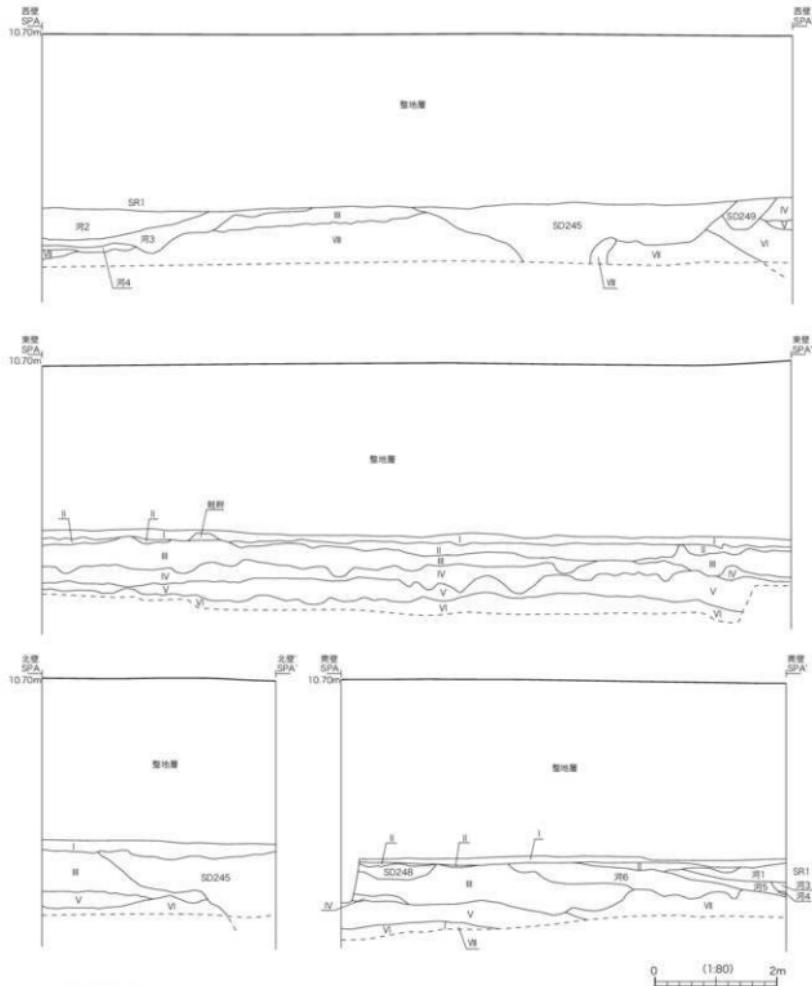
VII層：黄褐色の粘土で、鉄分を多量に含む。

VIII層：砂礫層で、A区の最下層も同様である。



層位	土色	土性	備考
I	Z.5Y3/2 黒褐色	砂質シルト	
II	10Y4/6 黄色	砂質シルト	区の基本層序層に相当する
河1	10Y5/4 にじい赤褐色	砂質シルト	河川堆積層
河2	10Y3/2 オリーブ褐色	砂質シルト	河川堆積層
河3	2.5Y4/2 姫紅褐色	砂質シルト	河川堆積層
河4	10Y6/6 赤褐色	砂質シルト	河川堆積層
河5	10Y4/4 黄色	砂質シルト	河川堆積層
河6		砂礫	1~5mmの小石と砂

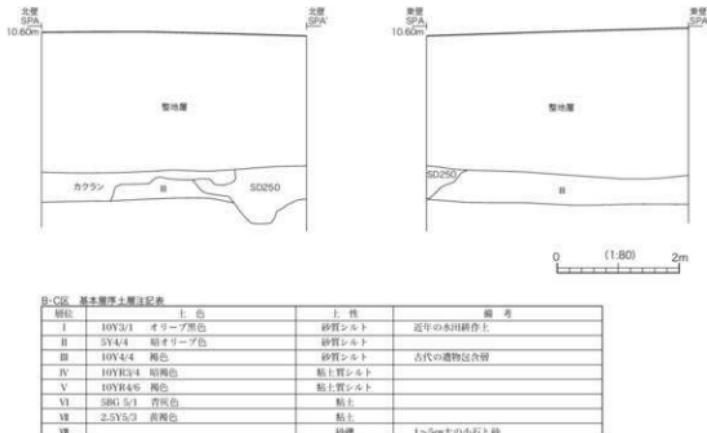
第4図 A区基本層序図



SR1河川土層注記表

層位	上色	上性	備考
河1	Z.5Y3/3 細オリーブ褐色	粘土質シルト	砂混じり
河2	10YR3/3 姫褐	粘土質シルト	
河3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
河4		砂礫	2~5mmの小石と砂
河5	10YR4/3 にむい黄褐色	粘土質シルト	
河6	10YR1/3 姫褐	粘土質シルト	砂混じり

第5図 B区基本層序図



第6図 C区基本層序図

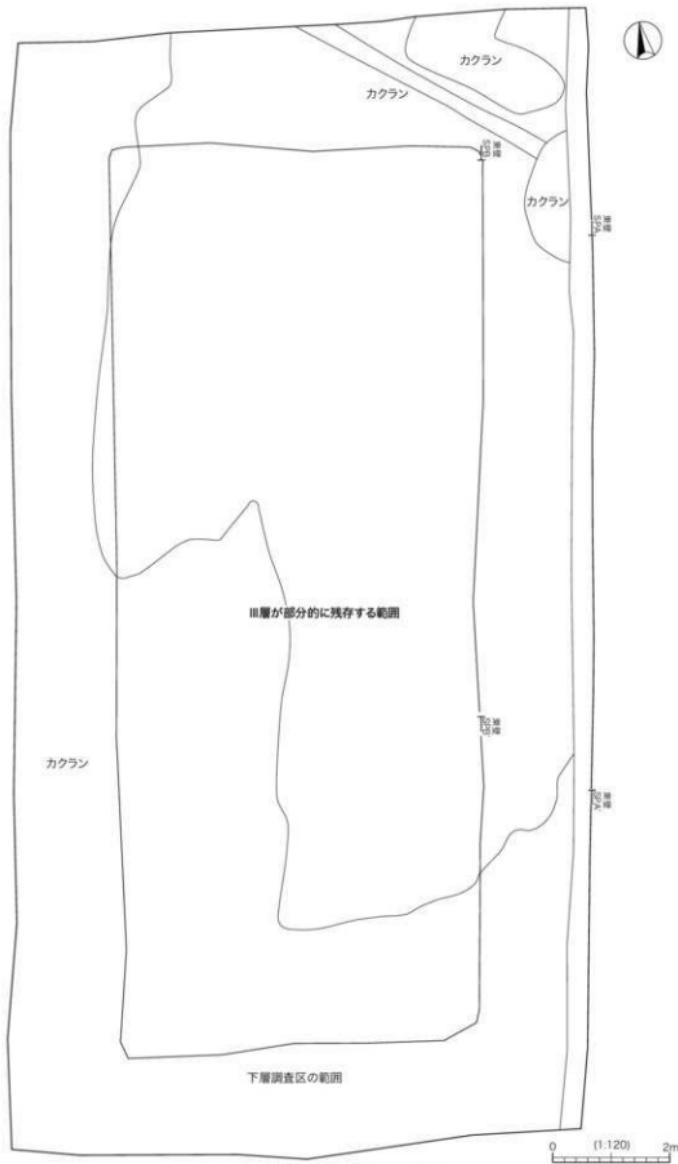
## V 検出遺構と出土遺物

A区からは遺構は確認されず、発見された遺構としては、B区及びC区から溝跡6条、ピット8基のほかに河川跡が確認された。出土遺物は土師器・須恵器の破片がほとんどであるため、復元実測等で図示可能なものを掲載した。

### 1. A区(第7図)

遺構確認面となるⅢ層上面の精査を行ったが、西～南側にかけては後世の搅乱により大きく削平され、Ⅲ層は部分的にしか残存しておらず、遺構は検出されなかった。遺物は縄文土器・土師器・須恵器の破片が数点出土している。

西側に隣接する副都心大通り線を対象とした調査区(2B区・平成14年調査)では、下層に縄文時代後期・晩期の遺物包含層が確認されていたことから、下層調査区を設定し精査を行った。調査の結果、Ⅲ層以下のIV～VII層は河川堆積層とみられ、その下は砂疊層となることから、縄文時代の包含層については今回の調査地点までは延びていないことが考えられる。重機によりこの砂疊層の一部をさらに3m下まで掘削したが、湧水が激しく壁面が崩落を起こすことから断面等の記録は作成できなかった。



第7図 A区調査区平面図

## 2. B 区（第8図）

III層上面の精査では、溝跡5条、ピット8基が検出され、ほかに河川跡が確認された。出土遺物は土師器・須恵器片が出土している。

調査区東壁に設けた側溝掘削作業中、IV層中から土師器片が出土したことから、IV層上面とV層上面での遺構確認のための精査を行った。IV層では上位から土師器・須恵器の破片が数点出土したが、遺構は検出されなかった。また、V層では一部トレンチを設定し精査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかつた。

### （1）溝跡

#### ① SD245 溝跡（第8・9図）

調査区東壁での観察によれば、本来の検出面はII層上面である。南西から北東方向に走り、南北軸はN-60°-Eである。検出長は19m、上端幅3.64～4m、下端幅30～47cm、深さ1mを測る。断面形はほぼ平坦な底面から30cmほどの高さまでは直立気味であり、そこから外傾しながら緩やかに立ち上がる。底面は若干凹凸があるがほぼ平坦である。底面のレベルは南西側が若干低いが、極端な差はみられない。

堆積土は4層に分けられるが、自然堆積とみられる。遺物は、1～3層より、土師器甕・須恵器甕（第11図1）、平瓦（第11図2）などの破片が数点出土している。最下層の4層からは、木片や木葉等が出土していることからある程度溜水していたものと考えられる。

#### ② SD246 溝跡（第8・9図）

調査区東壁での観察によれば、本来の検出面はII層上面である。SD 245溝跡と重複しており、南西側が切られている。南西から北東方向に走り、若干南東側に蛇行するよう、南北軸はN-66°-Eである。検出長14m、上端幅0.96～1.4m、下端幅30～80cm、深さ30～60cmを測る。断面形はU字形を呈し、外傾しながら緩やかに立ち上がる。底面は若干凹凸があるがほぼ平坦である。底面レベルは、全体的に北東側に若干傾斜している。

堆積土は4層に分けられ、自然堆積とみられる。遺物は、3・4層から土師器壺・甕・須恵器甕（第11図3）などの破片が数点出土している。

#### ③ SD247 溝跡（第8・9図）

検出面はIII層で、南西から北東方向に走り、南北軸はN-65°-Eである。検出長3.5m、上端幅48～56cm、下端幅24～28cm、深さ22～30cmを測る。断面形は逆台形を呈し、外傾しながら立ち上がる。底面は若干凹凸があるもののほぼ平坦で、北東側が5cmほど低くなる。

堆積土は単層であるが、自然堆積とみられる。遺物は、底面から土師器甕と須恵器甕（第11図4）の破片が出土している。

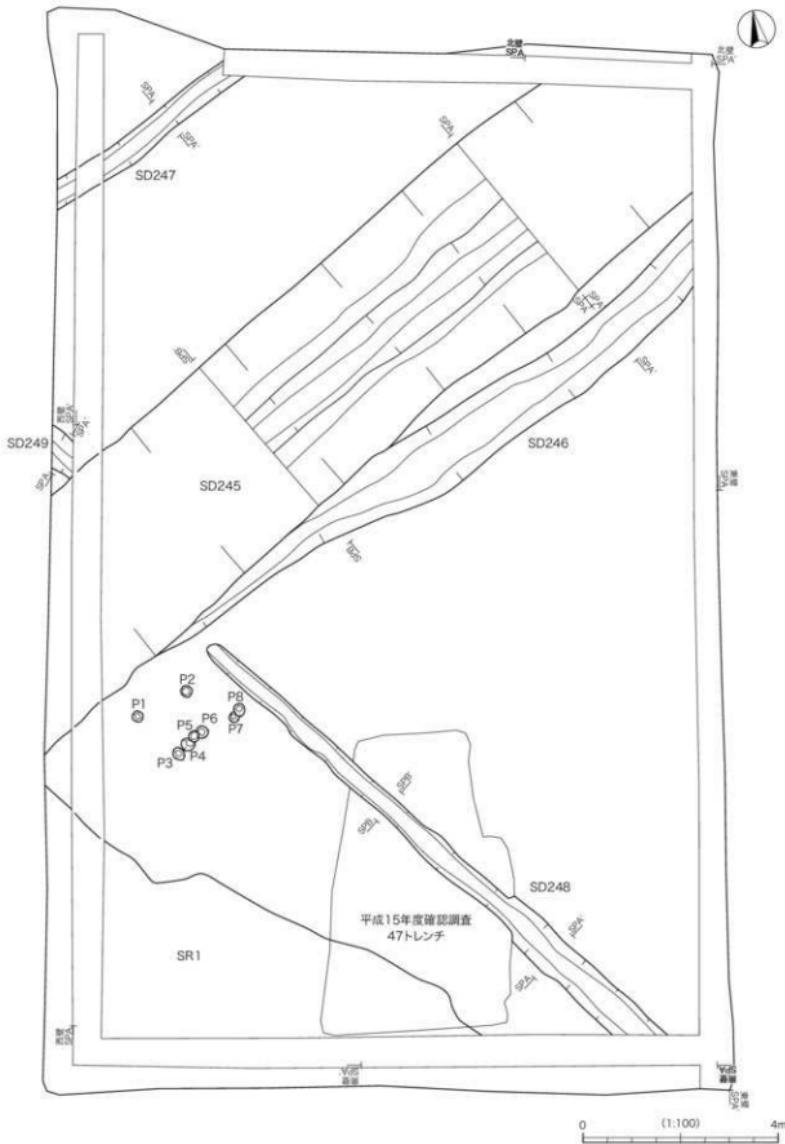
#### ④ SD248 溝跡（第8・9図）

南壁セクションによる観察では、III層上面からの掘り込みで、南東側は上部にII層が堆積している。北西から南東方向に走り、南北軸はN-37°-Wである。検出長12.3m、上端幅36～79cm、下端幅21～46cm、深さ5～42cmを測る。中央部から北西側にかけて、後世に削平を受けたものとみられ溝幅が狭くなっているが、本来は南東側と同じぐらいの幅だったと考えられる。断面形は北西側が逆台形、南東側がU字形を呈し、外傾しながら緩やかに立ち上がる。底面は凹凸があるもののほぼ平坦で、北西側に比べ南東側が20cmほど低くなる。

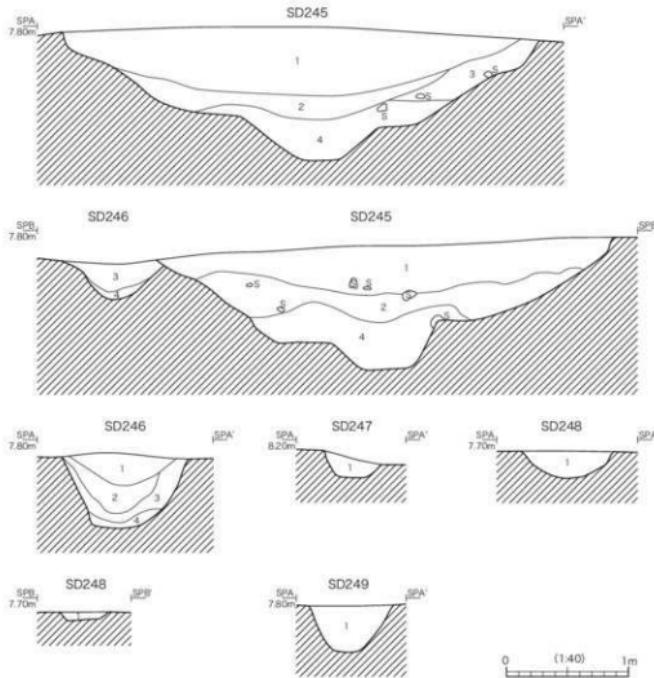
堆積土は単層であるが、自然堆積とみられる。遺物は出土しなかつた。

#### ⑤ SD249 溝跡（第8・9図）

検出面はIII層で、南東側をSD245溝跡に切られている。北西から南東方向に走り、南北軸はN-37°-Wである。検出長1m、上端幅70cm、下端幅20cm、深さ42cmを測る。断面形は逆台形を呈し、外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は単層で、自然堆積とみられる。遺物は出土しなかつた。



第8図 B区遺構配置図



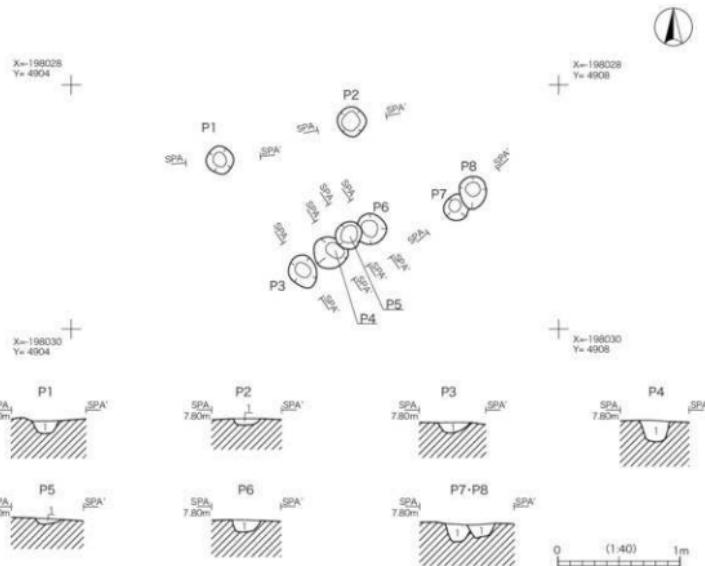
第9図 B区溝跡の土層断面図

遺構名	層位	上色	上性	概 観			
				風化	上部	下部	深さ
SD245	1	10YR2/3 明褐色	砂質シルト	若干粘性有り、下部に鉄分を少量に含む			
	2	2.5Y3/3 始オリーブ褐色	粘土質シルト				
	3	10YR3/3 明褐色	砂質シルト	田植の痕跡を含む			
	4	2.5Y3/1 黒褐色	粘土質シルト	木柄・木葉等を含む、ダイカ化			
SD246	1	2.5Y3/2 オリーブ黒色	砂質シルト				
	2	10YR3/4 明褐色	砂質シルト	若干粘性有り			
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	田耕痕跡を含む			
	4	10YR4/1 黑褐色	粘土質シルト				
SD247	1	10YR3/4 始褐色	砂質シルト				
SD248	1	10YR3/1 黑褐色	粘土質シルト	田耕がブロック状に現れる			
SD249	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト				

第1表 溝跡観察表

## (2) ピット (第10図)

調査区の西側でまとまって8基 (P1~8) 検出された。平面形はほぼ円形を呈し、径20~28cm、深さ5~18cmで、柱痕跡はなく建物等の配列も確認されなかった。いずれのピットも遺物は出土しなかった。



第10図 B区ピット平面図

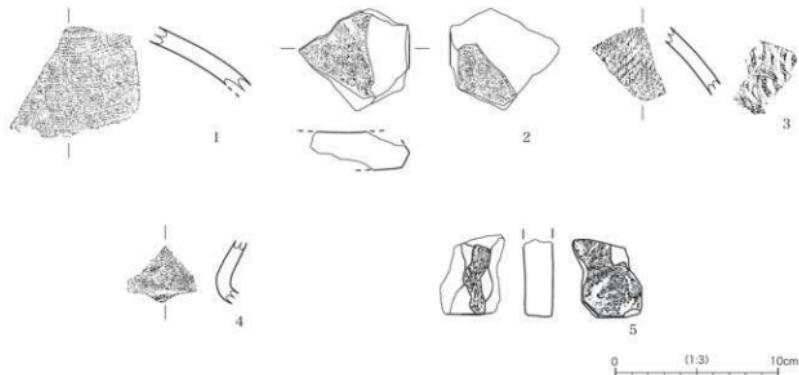
No.	地図・グリッド	形状	長軸 (mm)	短軸 (mm)	深さ (mm)	層位	埋土		重複など	備考
							上色	上質		
P1	B13	円形	23	22	10	I	IOYR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	柱痕なし
P2	B13	円形	24	24	5	I	IOYR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	柱痕なし
P3	B13	円形	28	22	8	I	IOYR3/2	黒褐色	砂質シルト	柱痕なし
P4	B13	円形	29	26	17	I	IOYR3/3	暗褐色	粘土質シルト	柱痕なし
P5	B13	円形	23	21	5	I	IOYR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	P4-6を切る
P6	B13	円形	25	25	10	I	IOYR3/3	暗褐色	砂質シルト	P5に切られる
P7	B13	円形	22	20	14	I	IOYR3/4	暗褐色	砂質シルト	P8に切られる
P8	B13	円形	27	22	11	I	IOYR3/3	暗褐色	P7を切る	柱痕なし

第2表 ピット観察表

### (3) その他

#### ① SR1 河川跡 (第8図)

調査区の南西側で、北西から南東方向に走るように確認された。調査区壁面での堆積状況をみると、南側に傾斜するようであるが規模等は不明である。Ⅲ層堆積後に形成されたもので、SD248溝跡と同じく上位にはⅡ層が堆積している。遺物は、Ⅰ層から平瓦（第11図5）の破片が出土している。



層級番号	堆積番号	出土遺構	解説	種別	器種	口径×底径×高さ(cm)	外面調整	内面調整	参考	写真回数
1	E-1	SD245	3	直底盤	甕	- × - × (6.20)	ハケヌ(?)	叩き目→ロクロ調整		7-1
2	G-1	SD245	1	平瓦		長(0.5)×幅(0.7)×厚2.4	布目痕	ヘラナギ		7-2
3	E-2	SD246	4	直底盤	甕		平行叩き目	青海波文		7-3
4	E-3	SD247	底面	直底盤	甕	口径(4.1)×幅(4.9)×厚1.7	ロクロ調整、鉤部櫛引き波文	ロクロ調整		7-4
5	G-2	SR1	1	瓦	平瓦		布目痕	ヘラナギ		7-5

第11図 SD245・246・247溝跡 SR1河川跡 出土遺物

### 3. C 区 (第12図)

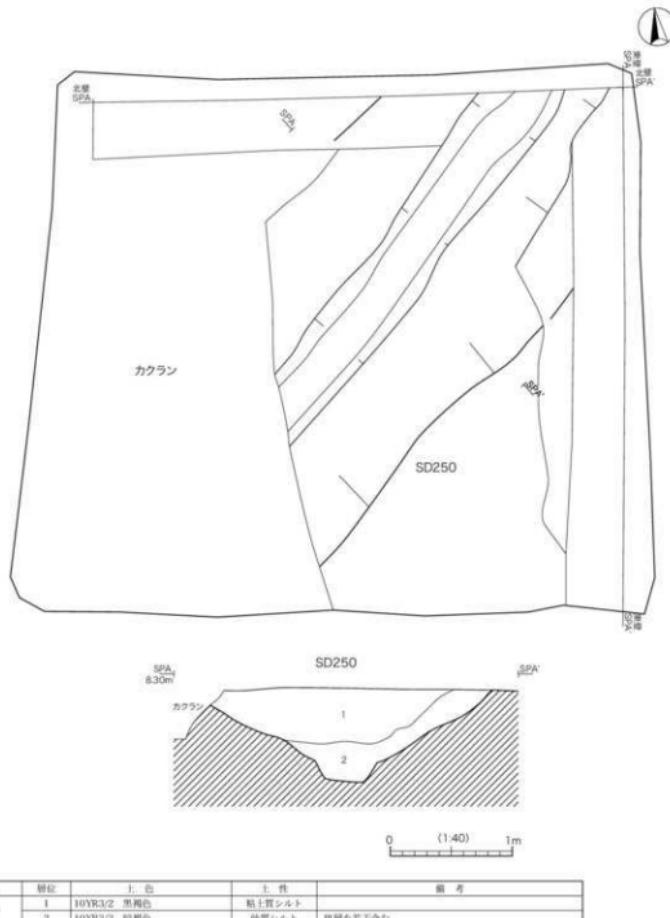
非常に狭い範囲の調査区であったが、溝跡1条が検出された。

#### (1) 溝跡

##### ① SD250 溝跡 (第12図)

検出面はⅢ層で、北～西側は擾乱により壊されているが、南西から北東方向に走り、南北軸はN-45°-Eである。検出長4.5m、上端幅2.3m前後、下端幅17～31cm、深さ76cmを測る。断面形はSD245溝跡に類似しており、平坦な底面から20cmの高さまで直立気味であり、そこから外傾しながら緩やかに立ち上がる。

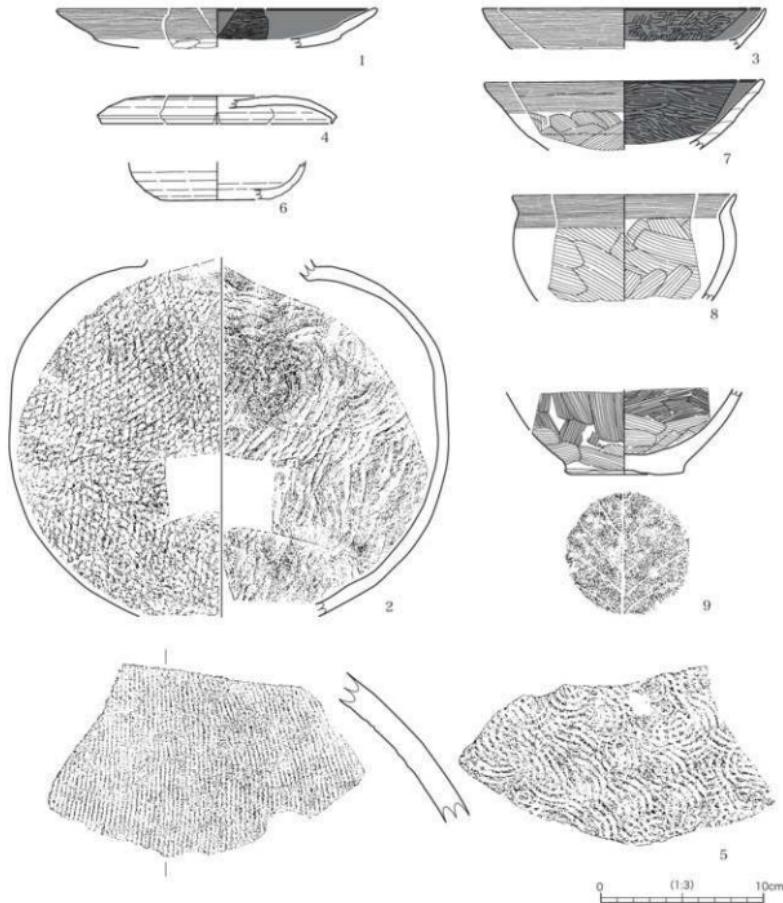
堆積土は2層に分けられるが、自然堆積とみられる。遺物は出土しなかった。



第12図 C区遺構配置図・土層断面図

#### 4. 遺構外出土遺物（第13図）

遺物はⅢ層全体とⅣ層上位から若干出土している。土師器の壺（第13図1・3・7）・甕（第13図8・9）・須恵器の壺（第13図6）・甕（第13図2・5）・蓋（第13図4）などであるが、そのほとんどが破片資料としての出土である。



団版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	口径×底径×高さ(cm)	外面調査(文)	内面調査	参考	写真回数
1	C-1	A 1.8	複瓦	上輪留	环	(19.8)×—×(2.2)	口縁ヨコナヂ、体部ヘラケズリ	口縁～体部ヘラミガキ(黒色処理)		7.6
2	E-4	B 1.7	Ⅲ	留毛器	束		楊子状閉き目	青海波文		7.7
3	C-2	B 6	Ⅲ	上輪留	环	(17.4)×—×(2.5)	口縁ヨコナヂ、体部ヘラケズリ	口縁～体部ヘラミガキ(黒色処理)		7.8
4	E-5	B 1.3	Ⅲ	留毛器	束	(14.7)×—×1.7	ロクロ調整	ロクロ調整	外表面自然輪付器	7.9
5	E-6	B 7	Ⅲ	留毛器	束		平行閉き目	青海波文		7.10
6	E-7	B 7	Ⅲ	留毛器	环	—×7.0×(2.3)	ロクロ調整	ロクロ調整		7.11
7	C-3	B 1.6	Ⅲ	上輪留	环	(17.2)×—×(4.2)	口縁ヨコナヂ、体部ヘラナヂ	口縁～体部ヘラミガキ(黒色処理)		7.12
8	C-4	B 1.8	Ⅲ	上輪留	束	(13.8)×—×(6.5)	口縁ヨコナヂ、側部ヘラナヂ	口縁ヨコナヂ、側部ヘラナヂ		7.13
9	C-5	B 1.8	Ⅲ	上輪留	束	—×7.7×(5.2)	側部ハケヌ、底部木堀痕	側部ハケヌ→ヘラナヂ		7.14

第13図 遺構外出土遺物

## VI まとめ

- (1) 今回の調査地点は長町駅東遺跡の登録範囲の南端部分にあたり、平成15年に実施した確認調査から住居跡などは無く遺構密度も薄いことが想定されていた。今回の調査では、古代～中世にかけての溝跡が6条検出された。他にピット・河川跡も確認されたが、豊穴住居跡などの遺構は検出されなかった。
- (2) A区は古代の遺構確認面であるⅢ層面の1/2の範囲が、後世の搅乱により壊されており、残存する部分でも遺構は検出されなかった。また、Ⅲ層以下は古代以前の河川堆積層であることが確認された。
- (3) B区では、溝跡5条が検出された。調査区壁面の土層観察では、SD245・246がⅡ層上面、SD248はⅢ層上面からの掘り込みが確認された。遺構の時期については、Ⅲ層が古代の遺物包含層とみられることから、SD245・246が古代～中世、SD248が古代のものと考えられる。また、SD247・249は出土遺物及び重複関係などから、古代以降のものと考えられる。南側で確認された河川跡SR1は上位にⅡ層が堆積しており、古代～中世にかけて形成されたものと考えられる。
- (4) C区は、盛土整地前に削平を受けており、整地層直下でⅢ層が確認された。SD250はこのⅢ層上から掘り込まれており、遺物は出土しなかったが、断面形・規模等がSD245に類似することから古代～中世のものと考えられる。
- (5) 今回の調査は狭小な範囲の調査であり、出土遺物も少ないことから、溝跡の性格などについての検討はできなかつたが、今後行われる周辺での調査成果等とあわせて、長町駅東遺跡と郡山遺跡官衙との関係について検討していきたい。

### <参考文献>

- 工藤 信一郎他 (2007) 「長町駅東遺跡第4次調査 一仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査 報告書Ⅰー」仙台市文化財調査報告書 第315集
- 長島 栄一 (2005) 「郡山遺跡発掘調査報告書 総括編」仙台市文化財調査報告書 第283集
- 仙台市市史編さん委員会 (1999) 「仙台市史 通史編Ⅰ 原始」
- 仙台市市史編さん委員会 (2000) 「仙台市史 通史編Ⅱ 古代中世」

# 写 真 図 版





A区全景（南から）



A区下層調査区全景（南から）



I～III層南北・東壁（北側）土層断面1（西から）



I～III層南北・東壁（中央）土層断面2（西から）



IV～VII層南北・東壁（北側）土層断面1（西から）



IV～VII層南北・東壁（中央）土層断面2（西から）



IV～VII層南北・東壁（中央）土層断面3（西から）

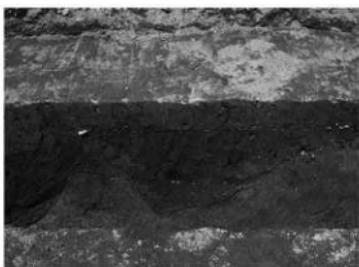


IV～VII層南北・東壁（南側）土層断面4（西から）

写真図版 1



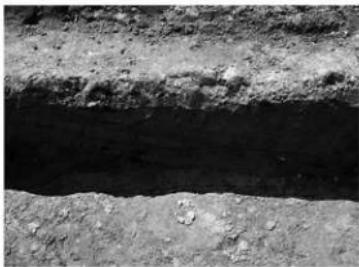
B 区全景（北東から）



南北・西壁(中央) 土層断面 1 (東から)



南北・西壁(北側) 土層断面 2 (東から)



東西・南壁(中央) 土層断面 1 (北から)



東西・南壁(東側) 土層断面 2 (北から)

写真図版 2



B区南北・東壁(中央)土層断面1(西から)



B区南北・東壁(南側)土層断面2(西から)



B区東西・北壁(東側)土層断面1(南から)



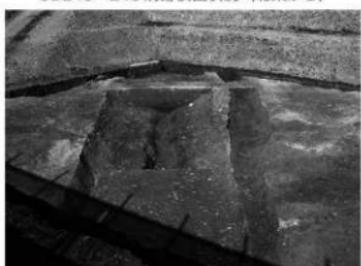
B区東西・北壁(中央)土層断面2(南から)



SD245・246溝跡検出状況(北東から)



SD245・246溝跡全景(北東から)



SD245・246溝跡全景(南西から)



SD245溝跡土層断面A(南西から)

写真図版 3



SD245 溝跡土層断面 B (北東から)



SD247 溝跡検出状況 (北東から)



SD247 溝跡全景 (北東から)



SD248 溝跡検出状況 (北西から)



SD248 溝跡全景 (北西から)



B区ピット群検出状況 (西から)



B区ピット群全景 (北西から)



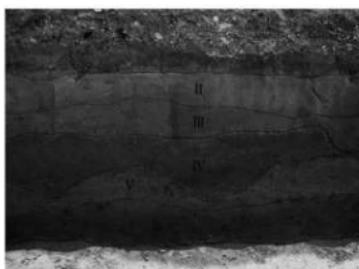
SR1 河川跡検出状況 (北西から)



B区下層調査区全景（北から）



南北・東壁 (北側) 土層断面 1 (西から)



南北・東壁 (中央) 土層断面 2 (西から)



東西・北壁 (東側) 土層断面 (南から)



東西・南壁 (東側) 土層断面 (北から)



C区全景（北から）



南北・東壁土層断面（西から）



東西・北壁土層断面（南から）



SD250溝跡全景（南西から）



SD250溝跡土層断面（南西から）



写真図版 7



## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	ながまちえきひがしいせきだいはちじょうさ							
書名	長町駅東遺跡第8次調査							
副書名	仙台市あすと長町41街区・マンション建設に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第331集							
編著者名	工藤信一郎 主浜光朗 藤田亮一							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目七番1号 TEL 022-214-8894							
発行年月	2008年3月14日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	遺跡番号	度数	年月	年月	年月	
長町駅東遺跡 第8次	宮城県仙台市 太白区長町六丁目	4100	01449	38° 13' 00"	140° 53' 22"	2007/7/2 ~ 2008/3/14	700	マンション建設に伴う発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長町駅東遺跡 第8次	集落地 包含地	飛鳥時代 ~ 奈良時代	溝跡 ピット	土師器 須恵器 瓦				

仙台市文化財調査報告書第331集

### 長町駅東遺跡第8次調査

—仙台市あすと長町41街区・マンション建設に伴う発掘調査報告書—

2008年3月

発行 仙台市教育委員会

宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1  
文化財課 022(214)8894

印刷 有限会社 細谷印刷

群馬県伊勢崎市今泉町2-939-5